

紅雪録

泉鏡花作

一

「旦那切符をお買ひ申しませう。」

「あゝ、何うぞ、」と袂から財布を出して、外套の袖の下で、手を差入れて算へたが、然もゝどかしさうに、突然、二等待合室の眞中に二ツ並べた、大なる卓子の端へ、倒にざらりと明けると、十錢五錢二十錢銀貨五十錢、紙幣まじりに電燈の下へ燦爛として擴がった、名古屋の停車場に於てある。渠は震ひつくやうに、胸を卓子に附着け、蔽ひかゝる姿で、片手でそゝつかしく勘定して、

「幾干だつたい。」

用を聞いた赤帽は、傍に小腰を屈め、

「貴客、何方まで、」

「新橋、」

「五圓十三錢でございます。」

「一圓二角三ツと、四圓、五圓と十三錢。」

と掴んで渡したのを、赤帽は黒い毛絲の手袋を嵌

めた、おほき 大な てのひら 掌に請けて、一度熟と見て、やがて出て行く。

停車場はがらんとして、夜の名古屋は眞白である。

客は小出しを財布に突込み、袂へ落すと、二ツ三ツ肩を揺つて、雪の名残を一邪険《らしく拂つたが、四邊をニし、つか／＼と前面の暖爐の傍に寄つて、立つたまゝ手を翳し、吻と息を吐いて、焦茶の中折を被つた其の頭を垂れたが、敢て是は、火氣がなく、些の暖さの取れない處から、石炭の燃えて居るや否やを見むために、俯向いた譯ではない。

丁ど其時、先刻から一人此の暖爐の前の腰掛に、外套の襟を立て、帽子の鍔を耳に伏せて、蹲つて、火箸で突いたり、掌で煽いだり、息を長く吹いても見たり、兎さま角うさま試みても、火の揚らないのに飽倦んで居た男があつて、此の旅客の來てゐんだのを見ると、ござんなれ相談相手、待兼ねたといふ風に、勇んで、帽子を揺上げるやうに顔を出したが、別に言葉を懸けさうにもないから、

「何うしたんだ、變な暖爐だな、」

と呟つぶやいても、猶聊なほいさかも動かうごかされた様子やうすがない。で  
到底たうてい是これは、石炭せきたんで燃もすといふことに就ついて、何等なんらの  
思慮しりよも、分別ぶんべつも、知識ちしきも、經驗けいけんも、方法ほうほうも、傳説でんせつも、  
歴史れきしも、勿論もちろん技術ぎじゆつも持もたぬ紳士しんしである、と斷念あきらめた  
顔色かほつきで、鐵火箸かねひばしをぐわちやり、

「えゝ、」舌打したうちをして腕うでを拱こまねき、喟然きぜんとして白塗しろぬり  
のたか高い天井てんじやうを仰あふいだ。

待合まちあひには唯たゞ二人ふたりのみ。

此處こゝへ赤帽あかぼうが其その紅くれなゐを鮮明あざやかに、小倉こくらの服ふくの色いろ  
の褪あせたのも明あからさまに、電燈てんとうに照てらされつゝ、落着おちつ  
いて入はひつて來きた。

「貴客あなた、切符きつぷ、」

「御苦勞ごくろう、」と受取うけとつた、旅客りよかくは入口いりぐちの方ほうを忙せはし  
さうに見返みかへつて、

「急行きふこうは十二時四分じふんだね。」

「はい、未だ二十分ばかり間がございます。」  
 「未だ、二十分、待遠だな、」と呟いた、けれど  
 も二十分は然したる長時間ではない、殊に此の人が  
 待合室に入つてから、忙しく汽車賃を出して、慌し  
 く歩行いて、急いで暖爐の傍へ寄つて、間もなく赤  
 帽の手から切符を受取つたまで、ものゝ十分とはかゝ  
 るまい、案ずるに何か仔細あつて、須臾も早く、名  
 古屋の地を離れて去りたいのであらう。

其の清しい目も、優しい眉も、鼻筋の通つたのも、  
 頬のふつくりとしたのも、停車場で慌て惑ひ、焦り、  
 ふためくやうな容貌ではない、但其の色は、丑満近  
 う誰も沈むよりは、より多く沈んで居る。

単に中折の帽子、外套だけの打見では、農も、工  
 も、商も、武も、文もないのだけれども、松は風に  
 も調べあり、梅は闇にも音信れて、此の人全幅の風  
 采は、誰が目にも學校出の年少き紳士であつた。

「お荷物は、」

「彼だ。」

細い大島の、羽織の袖を開いて指す、二ツある入口の扉、右なる方に、一脚の腰かけがあつて、旅行鞆の中形なのが置いてある。

「お一倒だけ。」

黙つて點頭く、と心得て會釋して、赤帽は直に踵を返した。

先刻から二人の話が途切れたら、直に、獨言して釣入れようと、頻に赤帽に目を注いだ暖爐の前の寒げな男は、恚う速に立去るのを捻向いて見送つたが、紳士の荷物の後へ、壁に背を凭せ、腕組をして、向直つて立つた、赤帽の肥つた扁い淺黒い顔を、間遠に熟と、怨めしさう。

折から、どや／＼と入つて來た。

眞先に一名の陸軍士官、帽子の低いのを冠つた肥大な紳士、瘡せた細君、老人夫婦で十三ばかりの被布を被た、孫か、末子かと見えるのを連れたい組と、高等學校の制服を被た學生一人、此の七八人の人數

に旅籠屋の女中、男衆が付き、見送人が交つて、待合の左右の入口から前後して繰込むと、直に八方へ入亂れ、ズツと出て退るのもあり、斜に突切つて暖爐を指すがあり、荷物を卓子の上に載せるのがあり、意味もなくぐる／＼と廻るのがありし、袖を拂ふのがある、下駄を鳴すのがある、靴を踏むのがある、反つて外套の袖を背後ざまに撥ねるかと思ふと、俯向いてコオトの裾を引張るのがある。

さて僅な待合の内にも、成りたけ足数の少い近路を知つたらしく、別に三名の赤帽は角度を料つて、肩に、頭巾に、腰にひだに、ちら／＼と雪を蒙らぬはなき旅客の間を、赤き鞆の飛交ふが如く働いた。いづれも停車場居まはりの旅店から唯廣い庭一ツ越すばかり、發車の間に、待合に入つたらしい些少な距離を経て來たのでさへ、見る限り黒いものといへば、不殘其の形を留むる、雪は降頻つて居るのである。

又今停車場に着いたさうな、敷石の際にかたまつた下駄の音、コト／＼と響を交へて、町に降り積る

こと約五寸なるを囁いて、此處に雪の浪の寄すると  
聞ゆ。

「旦那々々！」

と大聲に呼んで羅紗の筒袖を左右一杯に突張らせ、  
手首をすくめた、脊の圖抜けて高い、眉と目の間の  
伸びた、口の大な坊主の親仁。

素足に高足駄を穿いたがカラノノと叩を踏んで、  
陸軍士官の面前に不作法に突立つて、眞白な呼吸を  
吹き、大口を開けて、

「旦那々々。」

十二時に早や五分、今にも汽車が、と一同は身構へる、士官は左の腕を差伸べながら手袋を嵌め直して居た處。

「椿事でげす、旦那、汽車は参りません。」

「汽車が来ない、何うしてか。」

「はあ、雪で留つたのでございます。」 「雪で

留つた、そりや、」といつて、斜に卓子に凭懸かゝつて靴を投出して居た身體を眞直にして、室内の人々を<sup>みまは</sup>して唇に微笑を洩したのは、いで諸君、諸君と憂を俱にせむ、猛き武士の心優しき態度で《であつた。

「雪で、おや／＼、」

「此の雪で、」

「然うかも知れない。」

「然うだらう。」

と口にいひ交した、時も時なり、一人として此の新聞に耳を傾けないものはなかつたので、室内は残らず動揺み渡つた。彼の肥大なる老紳士にともなつ



た瘡ぎすな夫人の如きは、然も旅馴れた状に振舞つて、見送つて來たらしい、五十餘りの、是も古ぼけた羅紗の筒袖の襟を上げて、其癖咽喉も胸も釦を懸けず、めりやすの股引、だらしない尻端折で、大形の蝙蝠傘を携へた、前齒の抜けた老僕に對して、恰も我が家の奥と表で一寸別るゝやうに、軽く言葉を交しつゝあつたのさへ、二三歩、低い駒下駄で、つか／＼進んで出て、誰にいふともなく、

「まあ　まあ何うも、」と呟いた。

氣の疾い學生は、其の眞偽を正さんとや、制服の裾を煽つて改札口へ駈け出した、靴音は長く響いたのである。

不殘、自個の齎し來つた警報の反響であるのを視て、坊主天窓は得意顔に、今度は其の所謂旦那なる武官のみならず、多人數を對手のつもり、調子はづれの聲を一層張り上げ、

「どうも豪い事でございますよ。何しろ貴官、江州の山の中で列車が埋りましたさうで、又彼處い等可恐い雪だと申しますな。いや最うしツきりはござ

「いません、此の降ります事な。當所でも珍しい大雪で、はい、飛んだ話でございます、雪に埋るなんて、何うも、はゝ、はゝ。」と類當したやうな古羅紗の襟が、天窓へすぼんと冠さりさうに、身を揺上げて高笑す。

土官は秀でたる眉を顰め、

「何のくらゐ遅れるか。」

坊主は突張つた筒袖の手首をぐしやり、同じやうに眉を顰め、

「其がさ、もし、何時間おくれますかな、何だつて此の汽車が雪籠に遭ふなんて、東海道はじまつて無い事でございますでな。何いたせ、十時に此處へ着きます筈のな、其さへ今の期参りませんで。」

「呀、然うか、」

「そりや大變だ。」

「驚きましたな。」

沈着なる土官よりも、先づ四邊に立つたのが、聲々に騒ぐのであつた。

「えゝ、お寒うございますで、何なら最う一度、

てまへ  
手前どもへお歸りの上、御休息なさりましては如何  
でございませう。へい／＼、いづれ發車いたします  
じぶん  
時分を見計ひまして、又お知らせ申しますで、へ  
い。

「いや、そんなに遅れやせまい、」と同情ある士  
官は、自ら他をも慰めるが如き口振でいふ。

「だがもし、はゝはゝ、いづれ參るには參りませ  
う。それに汽車の事でございますから、へい、けれ  
ども夜が明けますまでは、お待ちなさる譯にはなり  
ますまいで、へい／＼／＼。」

ニヤ／＼笑ひかけてまくし立てるのを、士官は黙  
つて聞いて居たが、フト言急に調子荒く、

「見て來い！」

恰も構内で鈴が鳴つた。

兩三人同音に、

「宿引め！」

四

鈴ベルの音おとぐわらん、ぐわらん。駈かけだ出して行く坊主ぼうずの  
高足たかあしだ駄だかた／＼／＼／＼、カラコロカラ／＼と忙せはし  
げな多人たにんず数のあしおとひきつゞ跫音あしおとひきつゞ引續ひきつゞいて、廣潤くわうくわつなる停ステイション車場こうない構内こうないは、  
頃刻しばらく、顔かほと肩かたと褻つまと前後ぜんご左右さいうに入いり亂みだれた、汽き車しやは正まさ  
しく着ついたのである。

此この時ときまで、黒くろき外ぐわいたう套たうの見み好よげな品ひんの好よい後うしろ姿すがた、  
冷つめたき暖スト爐オブに手てを翳かざして悄せうぜん然ぜんとして差さしう俯つむ向むいた、以い前ぜん  
の年とし少わかき一いち名めいの旅り客よかくは、當たう夜やの一いち椿ゝんじ事じに觸ふれ廻まはつた  
豫よげん言しや者の坊主ぼうずの來きたつた時ときも、唯たゞ少すこし、頭かしらをあ上あげて、  
上うへなる大おほ時どけい計けいを一ひとめ目め見みたばかり、敢あへて振ふり向むきもしな  
かつたが、それか、あらぬか此この物もの音おとにはじめて此こ  
方たに身みを轉てんじて、徐おもむろに、入いり口ぐち間ま近ぢかな、彼かの荷に物もつを  
置おいた腰こしかけ掛かけに歩あゆみ寄よれど、承うけたまはつた赤あか帽ぼうは依い然ぜんとし  
て、壁かべに背せを凭よせたまゝ、腕うで拱こまぬいて突つ立たてり。

「君きみか。」

「私わたしでございます。」

「今いま來またのは、」

「十時に此處へ着きます分が、三時間遅れて來ましたので。」

「急行は、」

「此のあとでございます。」

暖爐を搔抱いて蹲つた例の男も、此の汽車に迷つたさうで、

「や、どツこいしよ、」と懸聲して、欠伸とゝもに伸上つたが、此方に赤帽の語つたのを聞きつけて、動かず、中腰で見合わせる。

「眞實でございますね、」

と瘠せた夫人が、眞先に、續いて、ごほ／＼と咳きながら肥大紳士、士官も學生も入交つて、一度待合を出拂つたのが一なだれに、改札口に近い、戸の一方から引返して來た。

學生は肩にかけた提鞆の重いのを、はづして手に提げたが、卓子の上へドンと投げて、

「徹夜だ徹夜だ、」といつて背後ざまに伸上つて、十二時既に三十分を過ぎた時計を視めながら、烈しく靴の爪尖を刻む。

愛に最も適當なる相談相手の出來たのは暖爐係で、  
渠は今おなじ腰掛の一方に少女を据ゑて、自分も又  
附添うた老婦人に對して、堪へに堪へた滿腔の不平  
を漏しはじめた。

「どうも此の貴女、新橋なぞは、何時だつてこんな事はござんせん。冬向は貴女、これでなくつちや凌げませんのに、何うでございませう、此の體裁ツたらないぢやありませんか。函嶺を越しますと、何となく人間の氣が節儉になりますので、鐵道の人たちだつて何も自分達のものぢやなし、とうにも石炭を入れて焚けば宜いのでございますがね。私はもう、先刻から恙うやつて始終せつちやうをして居りますけれど、火氣が失せて暖爐の裡が次第に黒くなつて來た中は、未だしも脈がありました。御覽じろ、これ、段々白くなつたのは心細いぢやありませんか。何もこれ、汽車が江州で埋まつたつて、暖爐の中へ雪が降るといふわけぢやなし、はあ、はあ、石炭がなくなつたんでさ。」

老婦人は火を求めて一服つけたが、灰だらけになつた女煙管を、空しく、懷紙で、くる／＼と捲いて

拭ひつゝ、

「此のお寒いのに、石炭がないのでございますか  
い。」

暖爐係は頸を窄めて、彼の耳まで被さつた帽子の  
裡で低聲になり、

「其が貴女、否、あるにやありますよ。それ、向  
うの卓子の下を御覧じまし、あれ、ブリツキの箱に  
入れて、鐵の十能までつけてさ、黒砂糖の接待とい  
ふ鹽梅式、石炭にあぶらがかゝつて、然も旨さうに  
きら／＼光つて居りませう。」背後に、老婦人が  
振り返るに連れ椅子に凭りかゝつて立ちながら、少女  
の身を庇うて居た同伴の老紳士も、齊しく石炭の箱  
の、暗き中に電燈の光を浴びて、幽に輝くのを眺め  
窺ひ、

「焚いては不可いのでございませうか。」「其  
處でございます、どうもソレ官有物でありますから、  
私どもが、濫に手をつけますわけには参りません  
て。」

五

「もし貴女、僅な事で大した違ひでございますと、暖爐が消えましたのでございますか。」

傍から聲を懸けたのは瘦せたる貴夫人。

此の女性は、先刻から見送の、例の前はだけの老僕を歸すことに忙がつて、暖爐の事などにはかゝづらつて居る暇がなかつた。

先づ其の吾妻コオトの袖口をキッチンと胸で合せて、其處へ手を組んで、拇指をかさねて乳の邊へ附着けるのをキツカケに、根上りに結ひつめた夜會結の項を伸べて、少し俯向き氣味になるとゝもに、（ねえ、お前、）と呼びかけて、扨て、御苦勞であつたこと、歸つたら宜しくいふこと、わざ／＼見送つてくれた其の深切を謝すこと、停車場まで来たゞけで厚意のほどは届いて居ること、別段に荷物もない事、遅いこと、夜が更けた事、路が悪いくこと、雪が積つて居ることを、細く一呼吸に順序正しくいつて、其の老體であることを最後に、御苦勞であつたを最初に、



最<sup>も</sup>う歸<sup>かへ</sup>つてくれといふのであるが、これは待<sup>まち</sup>合<sup>あひ</sup>に入<sup>はい</sup>ると直<sup>たゞち</sup>に取<sup>とり</sup>掛<sup>か</sup>り、凡<sup>およ</sup>そ八九度といふもの繰<sup>くり</sup>返<sup>かへ</sup>された。口<sup>くち</sup>上<sup>じやう</sup>一<sup>いち</sup>假<sup>げん</sup>すると、もに肥<sup>ひ</sup>大<sup>だい</sup>紳<sup>しん</sup>士<sup>し</sup>を一<sup>ち</sup>寸<sup>すん</sup>見<sup>み</sup>て、

(貴<sup>あな</sup>下<sup>た</sup>、)といふ。

づんぐりした聲<sup>こゑ</sup>で、

(あゝ、もう歸<sup>かへ</sup>つて宜<sup>よろ</sup>しい、歸<sup>かへ</sup>つて宜<sup>よろ</sup>しい。)とたゞそれだけをいふのであるが、いかにも取<sup>と</sup>つて着<sup>つ</sup>けたやうに大<sup>たい</sup>儀<sup>ぎ</sup>らしく、口<sup>くち</sup>重<sup>おも</sup>い。多<sup>た</sup>人<sup>にん</sup>數<sup>ず</sup>の中<sup>うち</sup>に、此<sup>こ</sup>の人<sup>ひと</sup>ほど無<sup>む</sup>口<sup>くち</sup>なのはなく、又<sup>また</sup>其<sup>そ</sup>の細<sup>さい</sup>君<sup>くん</sup>ほど口<sup>くち</sup>數<sup>かず</sup>の多<sup>おほ</sup>いのはなかつた。

今<sup>いま</sup>も今<sup>いま</sup>とて、此<sup>こ</sup>の度<sup>たび</sup>は、切<sup>き</sup>て――御<sup>ご</sup>苦<sup>く</sup>勞<sup>らう</sup>から――其<sup>そ</sup>の――老<sup>らう</sup>體<sup>たい</sup>――をいつたあとへ、恚<sup>いか</sup>ういふわけで何時<sup>いつ</sup>汽<sup>き</sup>車<sup>しゃ</sup>が來<sup>く</sup>るか、夜<sup>よ</sup>が明<sup>あ</sup>けるか、其<sup>それ</sup>さへ知<sup>し</sup>れぬ。道<sup>だう</sup>中<sup>ちゆう</sup>は不<sup>ふ</sup>慮<sup>りよ</sup>の出<sup>で</sup>來<sup>き</sup>事<sup>こと</sup>が多<sup>おほ</sup>いもの、嘗<sup>かつ</sup>て伊<sup>い</sup>勢<sup>せい</sup>を旅<sup>り</sup>行<sup>りやかう</sup>した時<sup>とき</sup>、外<sup>げ</sup>宮<sup>くう</sup>から二<sup>ふた</sup>見<sup>み</sup>ヶ浦<sup>うら</sup>へ廻<sup>まは</sup>る途<sup>とち</sup>中<sup>ちゆう</sup>で、雇<sup>やこ</sup>つた俵<sup>くわい</sup>が前<sup>まへ</sup>へのめつてあはや五十<sup>いすゞ</sup>鈴<sup>が</sup>川<sup>は</sup>へ倒<sup>たかさ</sup>に落<sup>お</sup>ちようとしたが、危<sup>あやぶ</sup>く車<sup>しゃ</sup>夫<sup>ふ</sup>の肩<sup>かた</sup>につかまつて無<sup>ぶ</sup>難<sup>なん</sup>であつた話<sup>はなし</sup>を、おくれ毛<sup>け</sup>を震<sup>ふる</sup>はしながら同<sup>おなじ</sup>一の姿<sup>しせ</sup>勢<sup>い</sup>を亂<sup>みだ</sup>さず、細<sup>こま</sup>やかに物<sup>もの</sup>語<sup>がたり</sup>つて、それから見<sup>み</sup>ると汽<sup>き</sup>車<sup>しゃ</sup>の後<sup>おく</sup>れるなどは間<sup>あひ</sup>ある習<sup>なら</sup>。

( 貴下、 )

( あゝ、 歸つて宜しい、 歸つて宜しい。 )

然うすると又前はだけの態度ど」といふのが、ひ  
しやげた帽子で續けツさまにお辭儀をして、次手に  
其の裾を掻合せると、やがて、仰向いて、ニヤリノ  
ゝと笑つて、果は目を瞑つて、どう仕り、さういひ  
終ると口を閉ぢる。其處で又裾が開く、一度は一度  
より次第に、めりやすの股引の股まで顯れるのが紋  
切形。

あぐね果てゝ、此の時、人を轉じて暖爐の方へ口  
を入れたわけ。

「はじめから威勢よく燃えては居りませんやうで  
ございましたがね、それでも赤いものゝ見えまし  
た中は、何となく未だ凌ぎ可いやうでございました  
すが、どうも堪りませんこと。」コオトの肩をし  
めて、益々袖口を引合せる。

ぐわさり、ずるゝと引出した石炭箱を引立てゝ、  
憤然と暖爐の前へ投下したのは學生である。

「構ひませんよ。何有、構ふもんか。」

と山装、十能をずばと突込んだ、例の男が未練らしく紺足袋を穿いた足を、冷い鐵に押つけて居たのを引込ませると同時に、プス／＼プス／＼と陽炎の薄煙。

あれだけ火がよいのかと、一同いひ合せたやうに悚然とした。

「來ました。難有い、」と、例の男、直に火箸を取る。

これを小耳に挟んだ商人風の山高帽。

「辻占が可うございますな、最う参りませう。」

同一風俗の一人が、

「いづれ追つゝけ参りませうが、しかし私は一時間や二時間、汽車の遅れましたのは致し方ないとして、前途が心配でなりません、函嶺は無事でありませうか。」

答へて、

「然れば何とも申されませんが、尾州参州は安心でございませう。私もな、何うも其邊を案じるのでござ

います。「藍關らんくわんより來きたるべき汽車きしやを待まちつゝ、泰嶺しんれいの嶮けんを説とくなりけり。

若い紳士しんしは、並ならんだ赤帽あかぼうにすら語ことばもかはさないで  
イたんだが、愁然しうぜんとして再ふたび時計とけいを望のぞんだ。一時半じはん。

何な為ぜか暖ストオフ爐フの火ひが燃もえぬ、突つく、叩たく、こぢるな  
ど、あらゆる手しゆたん段もで揉もんだけれども、僅わづかに煙けむりの濃こく  
なつたばかり、炎ほのほは絲いとはどに纏もつれても閃きいめめかないの  
で、例れいの男をとこは止やむことを得えず、再さいと度ひばし火なげだ箸なげだを投なげだ出して  
歎たんそく思そくした。

「こりや壊こはれて居あるんです、から、だらしがあり  
ませんや。雪ゆきで煙けむだ出しでも狂くるひましたか知しらん、こ  
んな事ことといふのがあるわけのものぢやございませ  
ん。」

少女せうぢよは裾すその燃もえ立たつやうな、友い染ぜん縮ちりめん緬はおりの羽は織おりを着き  
て、美うつくしい毛けいと絲えりまきの襟えりまき卷まき、さげ髪がみにリボンの飾かざり、拵こしらへ  
たやうな蝦えび茶ちや色いろの袴はかまを穿はいた臍らふたけた兒こであつた。

頸うなじを襟えりにすりつけて、うつとりした可か愛はいい聲こゑで、

「眠ねむいよう、眠ねむいよう、」

「まあ、可か哀はい相さうに、もうち些ちつと我が慢まんをおしよ。」と  
情なさけない聲こゑですかしながら、老らう婦ふ人じんは其その時ときまで手て傳つた  
つて煽あふいで居あた、一をり折をりの懷くわい紙しを詮せん方かたなげに袂たもとへ入いれ

る。

背後うしろから老紳士らうしんし、

「寝ねると風邪かぜを引ひくで、辛抱しんぼうせいよ、佳いい兒こぢやの、佳いい兒こぢやの。」

瘦やせた貴夫人きふじん何條なんどうこれを見みて黙もくして止やむべき。

「お孫様まごさまで在いらつしやいますか、まあ、お美うつくしい、  
嚙さそおねむでございませうねえ。」

「はい、末すゑ子こでござんして、いゝえ明あけまして  
十三じふさんになりましたが、孩兒ねんねで仕様しやうがございません、  
はい、否いゝえ、静岡しづをかの些ちと手前てまへで下おります。こんな事ことと  
存ぞんじましたら、今夜こんやは逗留とつりうをいたしませうものを、  
此この汽車きしやで歸かへりますやうに、宅たくへ電報でんぱうをかけました  
から、皆みんな停車場ステイションで待つて居をりませう。はい、此この娘こ  
の兄あにや、貴女あなた、姉あねどもでござんして、何事なにこととは存ぞんじ  
ませんから、路みちで又またどんな間違まちがひでもありはせんか  
と、大抵たいてい心配しんぱいをいたして居をりませう。些ちつとでも疾はやく  
貴女あなた。

今更いまさら此地こつちに泊とまるわけにも参まゐりませんし、然さうかと  
申まをして、逆とても今夜こんやは歸かへるまいなぞと存ぞんじて、皆みんなが宅たく

へ引取りますと、其も難儀なのでございましたね。

宅から持つて来た車が居りませんと、こんなに遅く、どうすることも出来ません。雪道を貴女、これ連れまして小半路歩行かねばなりません。」

「私歩行のは厭よ、母ちゃん。」と泣聲になつて少女は頬に頸を動かす、母の老婦人も涙ぐんで、

「お前そんなことをいつたつて仕様がありません。はい、はい、否學校のお休みにお伊勢様へ詣りましてねえ、おもしろかつたね、いゝことをおしだけれど、後が悪くつて困りましたねえ。」と、頬ずりして顔に顔。

待合の同情は、不殘此の母子に集つて、慰むるもの勵すもの、騒然となつて、暖爐は冷いまでも、一時電燈はニと其の光を増した、がやがて其の反動は著く、氣の滅入るばかり寂然とした。

一組づゝになつたと思ふと、途切れ途切れ、一組づゝ

て細語となり獨言となつて、果は一言も發する者さへなくなつた。

少女は老婦人の腕に突伏した、例の男は暖爐の上に、やけに肱をついて打傾いた。士官と學生とは左右から卓子の上へ半身を乗出して、國民と讀賣とを打視むる。傍に二倒の商人は、すねたやうに、背中合せになつて、氷りついて、一は西の方藍關の汽車を待ち、他は東の方秦嶺の嶮を想へり。めりやすの股引は、あらゆる徒然と退屈を吸ひ盡すばかり、口と股を押開いて、壁際に仰様。少し放れて肥大紳士と、押並んで腰かけて、瘦せた貴夫人は、姿勢を正しく、即ち胸尖に指を組んだが、其のコオトの色も顔の色も、ものゝ幻の消え際かと茫乎として、電燈も且つ白け渡つた。

恁くして莊嚴なる此の名古屋の停車場も、雄大な雪の中に、唯偏に孤驛の掘立小屋、屋根あり柱ある建物に過ぎざるのみ。



## 七

更に長方形の入口の扉の中に描かれたる、室外の光景を透かし見れば、あはれ、果敢い風情であつた。

人々は唯まばらに黒く淡き土間の上に、斑々として、吹きつくる風にはら／＼と白き汐は、岩に碎くる潮に似て、尾張國を押浸した雪の大浪の退いたあと、散々に名残の海松布を撒き散らした趣あり、彼處にも又小さな暖爐を取巻いて、二重三重に輪を造つたか、筵の繩の斷れたる如く、横倒れになつたるあり、俯伏になつたるあり、つんのめつたかと思ふあり、行倒れの如きもあり、赤毛布に莫塵を交へ、風呂敷に頭巾を並べて、夜氣沈々、地の底に、あらゆる構内の光明を引き込む時、壁の色灰に似て朦朧として見えたるありさま、荒海なる難破船の、釘の残つた此一室に、幾百年の昔より、底の藻屑に影を留めて、世を終るまで怨靈の消えざる姿に異なるなく、時として遙に薄ら蒼き火の暖爐を透きて見えるのも、此等の執念を愍みて、魔王が船幽霊に與ふといふ、呪の炎かと物凄い。

然れば硝子の窓越の、停車場前なる廣場も、白き海の動くに似て、二層三層の高樓に、ちら／＼と、電燈の沈んだ色の揺ふさへ、暗夜の潮の輝く風情、空恐しく寂寞として、唯聲は風。音は雪、ものゝ氣勢は寒さであつた。

時に彼の少き旅客は、低し、といふよりも、寧ろそれよりは發し得ないやうな沈んだ調子で、  
「君、君、」と二聲呼んだ。赤帽は舊の如く腕を拱いて壁に描かれた姿で突立つて、稍頭を下げて居た。離れたものには居睡をすると見えよう。但突出でた廂の下に、黄色を帯びた一雙の眼は、怪しき星の光を帯びて、圓かに開いて居たので、重い口ながら速に應じた。

「はい、」  
少い旅客も、恐らく渠を眠つて居ると思つたのであらう、餘り器用に返事をされて、はツと出後れたか、少時して、

「何は、酒は買つて貰へまいか。」  
「は、」  
「酒さ、」

「御酒でございますか。」

「何處か、其處等に賣つちや居らんか。」と然も人聞を憚るらしい。

「え、構内の出商人は皆引いて了ひましたですが、未だ起きて居れば、停車場前の旅籠屋にはございません。」と是も心得たらしく密にいふ。

「禮をする、君でなくつても誰か目着けて、一ツ御苦勞を願ひたいんだ、お頼みだが、」といった顔の色、以前より猶蒼う、

「是で、何うか、」  
衝と手に渡した一枚の紙幣は、豫め懐手の袂に取り出して居たのらしい。

「何のくらゐ買ひますか。」

「大なのを二本ばかり。」

「鑢詰で、四合入の、はい、宜しうございます。」と翻然、壁から放れたが、身體を廻らして出ようとして、フトしんせつに心付いたと見えて、入口の扉を入変りに八夕と閉めようとする。

擦れ違ひに、すツと入つて来た婦人がある。

黒綾くろあやのコオトを着て、藍鼠縮緬あゐねすみちりめんの頭巾づきんを、被らず、  
ト緩く頸くびに巻つけた、生際はえぎはの濃い、揉上げもみあの深い色いろ  
ツばい、ふさ／＼とあるのを堆うづたかい銀杏返いてうがへし、ぱつちり  
した黒目勝くろめがちに、一寸嶮ちよつとけん、伏目勝ふしめがちで然うとは見えみ  
色いろの飽あくまで白しろい、圓顔まるがほではないが細面ほそおもてといふでも  
ない、肩かたも腰こしも小ぶとりな中年増ちうどしま。

口くちは唯ただ美しい飾かざりだけにつけたやう、ものはいふま  
じい状さまに固かたく唇くちびるを結むすんで、澄すましてツンとして反身そりみ  
なり。

續いて白い手巾を襟にかけた、薄命らしい小女が、  
両手に、大な風呂敷包と革鞆を提げて、ちよこ／＼  
とお供で入る。

あとをドン、赤帽の姿は消える。

扨て長者町あたりと見えた、此の兩女は、齊しく  
十二時以前から待草臥れる連中であるが、雪に最も  
近い構内の入口の腰掛を、二人で占めて、氷りつ  
いた風情で居た。

惟ふにお納屋の中二階、將たそれ河文の奥座敷に  
あらざるよりは、漫りに洩らすまじき嬌音を、うつ  
かり知人に聞かすまじく、故らに遠ざかつて居たの  
であらう。否や、此の待合室に旦那云々、説をなす  
ものあらむか、未だ孰か是なるを不知。

今赤帽が扉をさゝむとしたので、餘りに三等の待  
合の、船幽靈の如き物凄さに堪へかねて、こゝに其  
婀娜たる姿を顯したに相違ない。

直すくに年とし少わかな旅りよ客かくの居ある、端はし近ぢかな件くだんの椅い子すに背う後しろ向むきになつて腰こしをかけた、間あひだへ持ぢ参さんの荷にもつ物つを入いれて、  
小こ女をんなは傍かたへに悄しよんぼり然り。

定ぢやうに入いつた如ごとき前むか面かうの隅すみなる、瘦やせた貴き夫ふ人じんの、  
一ち寸よいと顔かほを上げて、此こ方なたに打うち鬢ひそんだ眉まゆを向むけたばかり、  
敢あへて一にん人にんとして目めを着つけようとするものはなかつた。

實じつ際さい、此この待まち合あ室しつは、爾しかき尤いっ物ぶつを求もとむるより、列れつ  
車しやを欲ほつするに急きふなのである。

ぎいと扉ドアが、赤あか帽ぼうを附くつ着つけて、ぴたんと閉しまつた。

折せつ角かくの人ひとの頼たのみ、無むにならないのを嬉うれしさうに、し  
かんだ面つらに笑あみを湛たへて、人ひとには藏かくすものゝやう、上う  
衣ぎを開ひらいて脇わきの下したに忍しのばして來きた、二に本ほんの鑷びんを密そつと  
出だして、

「へへへへへ、」

「どうも御ご苦く勞らう、」  
といつて旅りよ客かくは何な故げか深ふかい  
歎たん息そく。

「旦那だんな、お剩つ錢りを、」

「そりや可いよ、可いよ、可いんだよ。」

「え 何うも、」

軽く一寸掌を上げて頂いたが、其のまゝ衣兜へ突込んで、片手も入れて、赤帽はぎろりと四邊を二はした。

心付いたか、慌しく、

「汽車は、關ヶ原で埋りました。急いでぐん／＼推して参りました為に、機關車の前へ、どえらい雪の山が持上つたと申しますな。何でも十二時四分に出ます、急行の切符を四五枚切りました處へ、電報が参つたさうで、此の停車場が出来ましてからはじめてなんで、はい。だが、旦那、先刻着きました此處までの列車も無事に参りましたし、様子が知れると直に迎の機關車と、工夫が大勢加勢に出ましたさうです、皆でえツさと引張つて参ります。遅れるたつて然う大した事もございますまい。えゝ、其の御酒、荷物へお入れ申しませうか。」

「いゝや、」

といったが、自分で革靴の口を開けて、差覗いて取り出した、四角な紙製の小箱一個、びり／＼と眞

中を裂くと、猪口が花片の牡丹形。

「戸外は未だ降つてるか。」

「どん／＼、どん／＼、」

「大雪だな、」といひ／＼器械の口を外して、斜に取る、鑊に進歩といふ銘あり。

寒さに手が震へたか能く注げず、烈しく傾いて唯僅に底に滴つたのを、ぐいと引かけ、又注いで、呻つて、ぐい。

衝と身を起して、例の澄ました美人は小刻に此の腰かけをツンと離れた、同席御免といふ如し。酒を厭ふと悟つたか、後姿をじろりと見て、屹と其の眉を顰めたが、杯を礎と下へ、四合入を倒にして、仰いで目を瞑つて半ばを一息。

もぎ離すやうに口を取つて、トンと其の進歩の底を外套の袖に支くと、吻と息を吐いたが、早や、目脛に颯と漲る血の色。

低聲で呼んで、

「赤帽君、どうだ君。」



呼ばれて赤帽は其の鼻にも似た鋭い目を細うしたが、酒の香を嗅ぐや否や、實はあらぬ方を見て居たのであつた。

「寒くつて寒くつて、堪らないぢやないか、君も一杯やれ。」

と破り棄てた包紙の端で、鑊の口をきりゝと拭いて、其まゝ赤帽に差向けた。

「ぐツと引かけ給へ。」

「難有うございます、まあ、貴客、あがりまし、」

「可いよ、澤山あるよ、さあ、君、」

「では其のお杯で下さいまし、其の方が結構でございます。」と然も、嬉しさうに手を出した。

直に獻して、

「成程然うか、ぢや、是で。」

酌は身體を捻向けて手が逆になつたので、だぶ／＼と出て、掌に溢れたので、固くなつて受けたる赤

帽、慌しく右の手で持ちかへると、唇に銜へて喰ひ切るばかりに手袋を外すや否や、未だ雫の留まぬ猪口の下へ重手をしたが、ぢツと受けて、我慢して、やがて、ぺろり横撫に嘗めた時、酒浸りの其の手袋は齒を放れてほろりと落ちた。

構はず赤帽の廂を、彼是旅客の肩と摺れ／＼に、近く見れば硬い薄髯の生えた頤を、猪口の上へ持つて来て、直角に腰を突出して曲げたが、ちゆツと吸つて舌鼓、タツタツ。

「へい、貴客へ。」

「まあ、お壓へだ。」

「で　　ですかな。」

「追つかけて最う一杯。否、未だ、構はず／＼。」

五杯目をぐくりと飲んで、漸ツと腰を伸して、短胴の下へしめ込んだ、三尺の下あたりへ、重いものゝやうに飲みさしを据ゑて持つ。

「何うだ、おもしろい事でもないか、」

旅客は此時ふら／＼として、  
腕を腰かけの手に曲  
げて、頬を支へ、仰向いて、  
赤帽の顔を見上げて打  
傾いた。

赤帽は庇の下で、額暗く伏目になり、

「おもしろいは旦那方こそ、當地へ新年の御旅行  
でございますか、」

「何、然ういふわけでもない、」

「何時おいでになつたのでございます。」

「昨日の朝さ。」

「東京から、」

「あゝ、然うだよ。」

「それは大分御遠方から、又強いお急ぎでござい  
ますな。」

「詰らんもの、」と投げたやうに落膽した風して  
いふ。

「そりや、最う一向詰りません、別に見るやうな  
處はありませず、名所も景色もございませので。」

「否、なか／＼然うぢやないよ、前津も佳し、大  
池も佳し、此の電車の通る正面にすツくり記念碑の

立つた處なんざ、西洋へでも行つたやうだ、田舎漢は目を驚かす。それに紫川といふ名所があるぢやないか、第一君たちの名所だらう。」

「御串戯おつしやいまし、私どもは何、それよりか、今度建立になります、納骨堂の方が、難有い名所なんで、はい。」

何でも信濃の善光寺より、もつと立派な普請ださうで、去年の夏からかゝつて居りますが、大した地形でございます。まあ其でも出来ましたら、精々通ひませうと存じまして、あくせく働いて居りますんで。

何の旦那、紫川なんて、名所どころか、金銀を棄てる溝でございます。」

と赤帽は苦笑。

「嘘を吐け、もつと飲んで、些と其の泥を吐かないか、」と此方も微笑んで鑿を取る。

赤帽は時に四邊を見たが、人は唯昏昏として、灰の如く、煙の如く、一の色濃き影もあらず。却つて

柳行李、支那革靴、風呂敷包など、算を亂したのが、  
むく／＼と動き出しつゝ、人語を發すらむ氣勢であ  
る。

憚らず杯を上げて、残れるを飲み干した。其を返  
さうとして猶豫つて、つまさぐつて、俯向いて熟と  
視めたが、

「此のお猪口は、旦那、牡丹亭のでございます  
な。」

「えゝ、餛飩の煮込が、彼處は名物でございます。火鉢ごと座敷へ持出して喰はせますが、閑靜な佳い處でございます。牡丹亭へおいでなさいましたのでございますか。」

「あゝ、牡丹亭へも行つた、紫川へも嵌つたさ、と酒がいはすか、明さまに語つたが、聲は沈んで居た。」

其處で赤帽が心安げに、

「失禮ですが、お杯を差上げませう、へゝへ、其はお樂みでございます。」

「何、」

と受けると赤帽が酌をする、旨さうに一口飲み、  
「私ぢやない、朋友さ、同伴さ、飛んでもない馬鹿な奴さ、好色な奴さ、な、しかし羨しい男さ。」

「へい、お同伴様で、」

些と要領を得ないで赤帽は眞面目である。

「長々と川一條や雪の原、嘸其の水は紫で、廓の灯は美しからう、こゝへ千之助が旅姿で通ふのか。」

「千之助様とおつしやいますと、」

「千の字さ、私の其の朋友さ。深見といつてね、兎角深みへ嵌りたがる男だ、又其の溝へでも墮ちなければ可い。」と半ば、獨言のやうにいつた。

「お一人行らしたんでは危険でございます、一所に行つてお上げなされば可うございました。だが旦那、然うすると婦人の兒が喜びますかはりに、恚うやつて結構な御酒を頂くわけには参りませんので。」

「お世辭もんだな、さあ、又上げよう、しかし君、男の酌では詰るまい。」

「どういたしまして、え、少しわけがございまして、婦人なんぞ人間とは思ひません。」

「いやお互にな、」

といつて呵と笑つたが、夜陰なり、折から片隅の一際薄暗い中に、此の聲は凄かつた。

「なんぞといふが、其の實は人間以上かも知れないよ、人は知らず私には事實然うだ、ねえ、赤帽君。」

「へい？」

「人間以上か、以下か、何うだか知らないけれど、何しろ名古屋の婦人は酒を嫌ふと見えるな。」

旅客は突然、妙なことを。

赤帽は何かは知らず、

「然うとも限りはしますまいで、一體に餘り酒の好きな婦人といふのはございません。」

「特に名古屋が甚しい、見給へ、此處に居た美人なんざ、酒をはじめめるや否や遁げました。」

と大分酔が廻つて來た、勿論一息に約二合を呷つたのであるから。

對手も以ての外可い機嫌で、

「成程御尤でございますな。」

「激しいのは、人の飲むのを見てさへ三舎を避ける、杯を獻したら駈落をして、酒を飲ませたら目を眩すだらう、實は其の深見千之助といふ男も、此の名古屋へ酒を飲まうと思つて出掛けて來たのさ。」

「何處かお氣に入つた料理屋がございますので、」



「否、飲ませて貰はうといふのだ、酒を強請りに  
来たんだね。」

「へい、」

「其の強請らうといふ對手は、當地の高等官の細  
君でね、所謂當世の貴夫人さ。多分名をいつたら君  
なぞも知つて居よう、地方は廣くツても狭いから、  
彼が誰某の夫人といつて指を折れば直に分る、名代  
の派手者で、殊に無類の美人だから。」

「え、成程、其のお方へ、千之助さんとおつし  
やるのが、酒の無心に入らしたんで、旦那、條が  
悪うございますな。」

「聞きやうも悪いんだ、何も銀の平打の簪や、金  
蒔繪の櫛を證據に、坐り込まうといふのぢやない、  
貴夫人といふのはね、其の千の字の姉さんなんだ

よ。」

「兩親りやうしんのない男をとこだから、姉あねは姉あねで勿論もちろんだけれど、母親ははとも、父親ちちとも、兄あにとも、叔母おばとも思おもつて、懐なつかしがる、慕したふ、甘あまえる、可恐おそろしがる騒さわぎなんです。其その姉あねに、去年きよねん手厳てきびしく禁酒きんしゆを命めいぜられたと思おもひ給たまへ。矢張やっはり新年しんねん、此この名古屋なごやへ來きた時ときの事ことで、弟あとうしは東京とうきやうに住すんで、姉あねは、かたづいた先さきの主人しゆじんが當地たうちへ勤つとめるので、來きて居ゐるんだが、久ひさしぶりで逢あつたんだ。殊ことに一ある學校がくかうも卒業そつげふして、まあ、榮譽えいよを擔になつて來きたといつても可いい、唯ただ二人ふたりの姉弟きやうだいです。夫人ふじんの方ほうでも懐なつかしい、慕したはしい、甘あまやかしたい、又また叱しかつても見みたい男をとこの兒こだから、逗留とつりうをして居ゐる中うちは、彼處あそこ、此處こゝと連つれて歩あ行く、朝あさツから御馳走ごちそうして、寝ねる間まも惜おしいくらゐに騒さわいださうさ。其そのうち又また夫人ふじんの知ち己きの令嬢れいぢやうなんか、女連をんなつれ三四人にんで、千せんの字じと一所いっしょに、前まへ津つの田圃たんぼをぶら／＼歩行あるで、皆みんなそれ指環ゆびわね、時計とけいね、金剛石ダイヤモンド、紅寶石ルビー、眞珠しんじゆ、黄金きん、珊瑚さんご、白襟しろえりやら、友い染ぜんやら、裾模すそもやう様やう、江戸褌えどづま、といふ扮装いでたち。畦あぜの稻塚いなづかの跡あとだの、大根だいこんの枯葉かれつばなどをおもしるさうに、田舎道あなかみちの丸木橋まるきばしを恐怖こはがつたり、手てを曳ひいたり、泥濘ぬかるみを、

に<sup>すべ</sup>つて、鼻紙<sup>はながみ</sup>を使<sup>つか</sup>ふのもあれば、向<sup>むか</sup>うで手巾<sup>はんけち</sup>をふるのもあつて、さゝんざで此<sup>こ</sup>の一行<sup>いっかう</sup>が牡丹亭<sup>ぼたんてい</sup>へ練込<sup>ねりこ</sup>だ時<sup>とき</sup>。

母屋<sup>おもや</sup>とは立離<sup>たちはな</sup>れた亭<sup>ちん</sup>づくりの六疊<sup>でふ</sup>か何<sup>なん</sup>かへ、色<sup>いろ</sup>と香<sup>かをり</sup>を充満<sup>いっぱい</sup>に陣取<sup>ぢんど</sup>つて、一寸<sup>ちよいと</sup>一口<sup>ひとくち</sup>といふ處<sup>ところ</sup>だが、女連<sup>をんなづれ</sup>、殊<sup>こと</sup>に其<sup>そ</sup>の姉<sup>あね</sup>さんは、千之助<sup>のすけ</sup>の些<sup>ちつと</sup>も左<sup>ひだり</sup>が利<sup>き</sup>かないのを知<sup>し</sup>つてるから、お銚子<sup>てうしぬき</sup>拔<sup>ひ</sup>で、といふ詔<sup>あつらへ</sup>になると、件<sup>くだん</sup>の千<sup>せん</sup>の字<sup>じ</sup>此處<sup>こゝ</sup>で堪<sup>たま</sup>らなくなつて、事露<sup>ことろけん</sup>顯<sup>あ</sup>に及<sup>およ</sup>んだといふのは、是非<sup>ぜひ</sup>お爛<sup>かん</sup>の暑<sup>あつ</sup>いのをと注文<sup>ちうもん</sup>をしたんださうな。

尤<sup>もつと</sup>も姉<sup>あね</sup>さんの知<sup>し</sup>つて居<sup>ゐ</sup>る千之助<sup>のすけ</sup>は飲<sup>の</sup>まなかつた、けれども最<sup>も</sup>う大<sup>だい</sup>學<sup>がく</sup>を卒<sup>そつ</sup>業<sup>げふ</sup>しようといふ間際<sup>まぎは</sup>から、些<sup>ち</sup>と仔細<sup>しさい</sup>あつて飲<sup>の</sup>みはじめた、なか／＼の酒家<sup>しゆか</sup>なんだ。

赤帽<sup>あかぼう</sup>は酌<sup>しやく</sup>をしながら、

「いづれ、お仕込<sup>しこ</sup>みでございませう。」

「馬鹿<sup>ばか</sup>をいへ、私<sup>わたし</sup>が仕込<sup>しこ</sup>まれた位<sup>い</sup>なものだ。

(生意氣<sup>なまいき</sup>だね、) 何<sup>なん</sup>かで仔細<sup>しさい</sup>なく許<sup>きよ</sup>可<sup>か</sup>が出<sup>で</sup>て、

直に杯洗がちり／＼、凡て、まぶし、茶碗蒸、お鮓  
に、奈良漬、甘いものは、むしくわん、外郎の類に  
至るまで、辛いといへば唐辛子にもかつゑて居た處  
だから、ぐいのみみに三四合またゝく間、口を喇叭に  
して、けるのを眺めて、呆れ返つて居るのを、  
（姉さん、）などゝいふと、此の聲の懸けやうが、  
魔性のものを呼ぶやうだつて交ぜ返した、人の悪い  
令嬢があつて、姉、串戯半分の不機嫌不斜。  
（私が困るわ、）と苦々しがつて居た中は未だ可  
かつたさうだツけ。

其の勢でふら／＼と出た、暮方だつたつてな、酔  
顔朦朧として眞赤だから、姉さんが、  
（恥つかきねえ、同行は恐れる。）  
とそれでも莞爾していふと、  
（其方で頭巾を被れば可い、）なんのつて大氣焰。

道が變つたから、あの大池のふちを通つた、黄昏  
なり、遠くでちら／＼と灯は點く、はじめてだから  
大な湖と見えたらう、困つた千の字は、龍宮の入口  
でも見つけたやうに、好い景色だつちや、ふら／＼

水際へのめるから、

（貴下、危いことよ、）ツてい、ふのがあると、  
姉さんは邪険な癖に、優しく眉を顰めながら、

（うつちやつてお置きなさい。）

（誰か相手はありませんか、直に心中だ。）と先  
生大生酔。

色氣かと思ふと、袂から、茶屋で攫つて来た、ゆ  
で玉子を出して囓ります。

是で最う當分勘當の價値十分だから、姉さんは貴  
婦人式の圓鬘、脊が高くなるほどツンとしてずん  
／＼、前へ行くあとから、よろ／＼と道を綾  
にかけて歩行いたが、一軒屋の手前に、路傍の明地  
の端へ、夕風で焚火がしてあつた。

ちよろ／＼炎の上つてるのを、とろりと見つけて、  
何處まで意地が汚いのか、止せば可いのに。」

「はて、へい。」  
と赤帽は猪口を差控へる。

「深見が巻煙草を出すと、突然口へ銜へて、蹠跟けながら點けようとすると、僅なことも恩愛で、蟲が知らせるとでもいふ事か。澄して前へ立つた姉さんが、其時フト振返つて、

（あゝ、危い、）といったが間に合はず、無精に程のあつた、懐手をしたまゝ口で吸つけようとしたから、ぐら／＼となつて、焚火の上へ横倒にツンのめつた。」

赤帽は思はず口へ出して、

「えゝ、危い。」

「そら、懐手だから足搔がつかない、其まゝ炎を嘗さうに、ぐた／＼となつたが、あ、あ、と皆いつたツ切。」

夫人が顔の色をかへて飛んで来て、地へ膝をつく  
と、友染の長襦袢が泥塗れになるのも構はず、一心  
になつて抱起したが、片袖宛で火さ。

自分でも紫紺の縮緬の襟卷や、江戸褌の彼處此處

焦こがして構かまはず、揉も消みす處ところへ皆みんな寄よりて始しま末まつはつけたが、直すぐに腕くるま車で愛あい知ち病び院やういんへ駈かけ込こむといふ騒さわぎぢやないか。

左ひだりの二うでの腕おほから大おほ火や傷けど、今いまでも痕あとは消きえないが、  
まるでこれから、

といつて旅り客よかくは袖そでをかゝげて見みせた、其その露あたらした  
のは右みぎの腕かひなで。

「ずつとこれへかけて朱しゆで刺ほり繡ものをしたやうに、俱く  
利り伽から羅もん紋ん々の龍りうの形かたち、可お恐そしい極ごく印いんを打うつた、其その  
千の之すけ助の手てを取とつて夫ふ人じんが自じ分ぶんは涙なみだながら、じり／  
＼とあぶらを絞しぼらせて、此こ處こできつぱりと禁きん酒しゆの申まを  
渡わたし。

尤もつともそんなにかたまるまでに、いかに親しん身みとはい  
ひながら、其その優やさしい介かい抱ほうといふものは、怪け我が人にんよ  
り夫ふ人じんの方が、いた／＼しいまで瘦やせたくらゐ。

此こ處こで一言ごんもなく恐おそれ入いつて、男をとこらしく立りつ派ぱに誓ちか  
つた。

( 決けつして酒さけはのみません。 )

恚かういふわけで酒さけを断たつたが、東とう京きやうへ歸かへつてから、  
又また感かん心しんに、一いつ滴てきなめ嘗なめても見みないといふ大だい勇ゆう猛めうな精しやう進しんさ、

まあ、ざつと一年間。」

赤帽は取つておきの手の猪口を、つく／＼と見てうつむきながら、然も感に堪へた趣で、

「御酒をおやめなすつた其のお方も感心でございますが、留めさせた其の御夫人は猶豪うございますな。眞心が通じませんでは、然うは為せられぬでございませうに。え、たとひ親身の姉様にした處で、今時そんな優しい婦人がありますか、いづれ極昔風なお嬢様で、女學校などといふものは、門をお潜りなさつたこともないお人でございませうですな。」  
と思ひ入つた様子で聞いたが、目は輝くのであつた。

旅客は何とも心づかず、

「どうして東京で有名な學校出のぱり／＼だ、縦の字も讀むし横の字もすら／＼讀む、馬や自轉車は知らないが、ぶらんこにも乗つたらう、荒き風處ぢやない、テニスの球にまで當つた人だよ。」

「へい、袴を穿いた夥間にもそんなのがありますか、へい、」



といつたが心ありげな、あとの言を酒で壓へて、  
赤帽はぐつと飲んだ。

「怪我にもそんなしんせつな人でもありませんら  
な、張合になつて留められませうに、私なども、へ  
い、是が病で不可ません、それでづつと御辛抱なさ  
りますか。」

旅客は丁と膝を拍つて、

「はゝはゝ、處が不可い。」

「はて、留められませんかい、」と彼方も色に出  
て眞赤に笑つた、齒が白い。

「其處で酒を強情りに來たのさ。」

「なるほど、」

「其の姉さんに、」

「へい、なるほど。」

「いかに飲みたければといつて、一旦断ちますと  
誓つたものが、對手が金比羅様でなくつたつて、む  
ざ／＼飲まれるものではない。

何、さきは婦人だ、しかも姉だ、また東京で酒を

飲のむのが名な古こ屋やまで知しれるものか、知しれたつて小こ  
兒もぢやなし、一人にんまへ前の男をとこだと、いつて了しまへばそれま  
でだが、其處そこは義理ぎりだ、情愛じやうあいといふもんです、  
「  
といひかけて悄然せうぜんとした。」

「そんならまたそれほど義理情愛をわきまへたら、黙つて禁酒をして居れば可いやうなわけになるが、其が不可い、といふのは、赤帽君、君は何故か十年の知己のやうな氣がしてならん、こんな場合であるからかも知れないが、私は然うではないやうだ。」

「私も貴客、何となく、へい、飛んだ無躰でございます。」

「あゝ、私の知己なら、千之助にも又知己だ。朋友のために、まあ、聞いてくれ給へ。」

元來ね、其の深見が酒をはじめたそも／＼が、何も好や道樂ではないんです。私なぞが見ても、止むを得ず酒にしたのだ、詰り薬なんだ。

奴は其の豫て生命がけで戀つて居た婦人があつた、思つて遂げざる戀で、其のものは他家へ縁づいてしまつたんだ。」

赤帽の眼はは又ぎろりとして、黄を帯びて輝いたが、人知れず一種異様なものであつた。若し一目は是を見たら、いかに酒が言はするにせよ、必ず其の物語を中止したであらう、けれども赤帽には庇があつた、庇は人に暗かつた。

「縁づいて了つたんだと、唯口でいへばそれだけの事だけれど、若い當人の身に取つちや、身體がしびれて血の色が變るくらゐ、それからといふものは、酒を飲まないで、千之助、顔に活きた色のある事はなかつたんだね。」

是だもの、いかに義理だつて、情愛だつて、姉さんの一言で酒を斷つたのは容易なわけぢやない、こりや私なぞには出来ない。

けれども又、情愛で飲みはじめた酒だから、同じ情愛で斷つことが出来たんです。

一體飲む中も、止めてからも、心が狂ふほど、情ない思ひをしながら、其處は教育のある男だから、やけを起すなぞといふ不心得な事は微塵もなく、蔭ながら其の餘所へ縁づいた、戀人の無事を祈り、幸

福なやうにと希つて、舅姑の氣質やなんか、實家の親だちより恐らく一倍だらうと思ふほど、氣を揉んでさ。いや、其の初産のおめでたさを、風の音信に聞いて、朋友の醫學生に、西洋産婆と、取揚の優劣を、内證で聞く如きに到つては、馬鹿々々しいが、心は清い。

然して其の男の心持といふのは、何時か、何年の後か、或は何十年経つてか、そりや知れないけれど、先方が白髪になり、自分も齒が抜けて、誰が目にも色氣のなくなつた時か、もし然までに待たないでも、自分も斷念めて他の女を女房に持てるやうになるか、或は一朝豁然として大悟徹底をしてだ、女に對して心の動かないやうな見留がついたら、其の時こそ戀人の手を公に握つて、御亭主の前、親類の前、知己の前で、一度自分が、どれほどに思つて居たかを、其の婦人に打明けて、薩張笑つて退けようといふのだつた。

何故なら年は若し、思ふの慕ふのといふ事なんぞは、天下の一大事と心得て居たのだから、情なく傍

へ縁えんづ附つかれるまで一度ども素振そぶりにさへ、前方さきへ心こころを通つうじたことがなかつたさうで、又またそれだけに心こころは深ふかいんだものね、死しぬまで黙だまつて居ゐるのは餘あまり情なさけないといふわけなんです。「と聲こゑもしめやかにいふのである。

赤帽あかぼうの顔かほの色いろは、やゝ解とけて、

「それでは約束やくそくをして置おきながら、寝返ねがへりを打うつたといふわけではございませんな。」

「眞個まったくさ。」

「へい、それならば未だましもでございませうがね、もしか寝返ねがへりを打うつた阿魔あまなら、活いかしては置おけませんで。」と、可恐おそろししい世辭せじをいつて、又杯またさかづきを傾かたむけながら、

「貴客あなた、心こころがはりなら女學生ぢやがくせいでございませうが、何なんにも知らしんのは大たいした薄情はくじやうな女をんなといふではありませんで、薄情はくじやうな女をんなでなければ、大方おほかた蝦茶袴えびぢやはかまは穿はいた事ことのない人ひとでございませう。」

「可恐おそろししく蝦茶えびぢやに崇たる、意恨いこんでもあるか、  
と不圖耳ふとみみに立たつてうら問とうたが、

「へゝ、何なに、然さういふわけでもございませんの

で。  
┌

「然<sup>さ</sup>うか、いや然<sup>しか</sup>し違<sup>ちが</sup>つたよ。千<sup>せ</sup>の字<sup>じ</sup>の其<sup>そ</sup>の叶<sup>かな</sup>は  
なかつた戀<sup>こひ</sup>人<sup>ひと</sup>といふのは、失<sup>ふ</sup>張<sup>はり</sup>姉<sup>ねえ</sup>さんなる夫<sup>ふ</sup>人<sup>じん</sup>の學<sup>がく</sup>  
校<sup>かう</sup>朋<sup>とも</sup>達<sup>たち</sup>で、しかも容<sup>きり</sup>色<sup>やう</sup>が佳<sup>い</sup>いので、兩<sup>りやう</sup>方<sup>ほう</sup>惚<sup>ほ</sup>れ合<sup>あ</sup>つて  
姉<sup>きやう</sup>妹<sup>だい</sup>同<sup>どう</sup>様<sup>やう</sup>、婦<sup>をんな</sup>人<sup>にん</sup>同<sup>どう</sup>志<sup>し</sup>で悋<sup>りん</sup>氣<sup>き</sup>をし  
たといふくらゐなん

だ。  
┌

「だから千之助の姉さんといふのも、大に其の間  
の弟の情を知つて居るから、同酒の意見にも、特別  
の意味が籠つて、實に涙があつたんだね。其處で、  
其まんま禁酒して、其の氣で辛抱をすれば、何事も  
なかつたのを、急に我慢が出来なくなつて、東京か  
ら酒を強請りに来たといふものは、何うです、去年  
の秋、其の戀人が、産後で果敢なくなつたぢやない  
か。勿論、華奢でね、どうせ、はじめツから兒を産  
まうなどは無理なんだ、無理だつて、しかし、これ  
ばかりは仕方がない。

仕方がないのに、斷念められないのは、千の字で、  
唯一心に、そら、今の其の機會を待つて、一度思つ  
たゞけを打明けようと、卑屈なやうだが因縁さ。そ  
ればかりを樂みに、當にして居た、其の美しい的に、  
ほろりと消えられては、急に闇、國も處も知らず名  
もない山の中に、眞暗な道を踏迷つて、唯だ便りに  
した綺麗な星に落ちられたやうに、心細く、情なく、  
寂しくなつて、其のまゝ死ぬのさへ、冥土に頼のな



いやうな、何ともいはれない心持。切て酒でもなくば、逆も立つちや歩かれなくなつたから其處で強請に來たわけなんだが。

其も勤める役所があつて、おいそれと、直に旅行も出來ないので、一日千秋、此の新年の休暇を待構へた。

今度は、兎も角も一旦男が盟を立てた、其の盟を破らうといふのだから、萬止むを得ない心の中をね。利發な姉さんは大抵容子で知つて居ても、是も道斷、つひぞ口へ出した事はないのだから、更めて打明けよう、手紙でいへる事ぢやない。

そんな、こんなで、昨日名古屋に出掛けたんです。

赤帽は庇を斜に、酒に熱して色づいた、耳を傾けて聞いて居たが、

「はあ、」

溜息をして、獨で頷き、

「酒も唯、恚うがぶ／＼頂いて了へば其まで、此の娑婆を素通りにしたも同一で、何の味もないでございませうが、そんなに噛めて召食つた、其の御酒は貴客、まづ、どんな味がしたでございませうな、」と舌打をしながら染々。

旅客は案外氣の抜けたやうに、

「いやはや、甘からず、辛からず、苦からず、澁からず、他愛のない、力のない、當のない、水のやうだといひたいけれど、それも汲立を飲むやうなものぢやなかつたさうだ。」

「へい？ 然ういたしますと、」と力を入れる。

「實は飲まずさ、」  
と崩折れていつた。

「おう、それぢや、其の姉さんとおつしやる夫人から、何てつてもお許が出なかつたのでございますか。」

「何これを許さないやうな思ひやりのない婦人なら、東京からわざ／＼、誰が強請りになぞ来るもんか。また、はじめツからそんな人には盟もしないさ。」

「では貴客、」

「居ないよ。」

「はて、」

「留守さ。暮の三十日から奈良へ旅行をして留守だといひます。其の主人も居ない、是は公用で、もつと以前に、佐世保の方へ行つて居るんだ。」

あとは書生と女中ばかり、森閑とした留守宅へ、昨夜一晚、望の酒處の沙汰ではない。

然も歸宅のほどは知れずといふね、然う何時までモ家をおあけはなさるまいつて傍ぢやいふのだが、日限で抜けて出た身體だらう。松の内待つて居る數ではないから、唯もう茫乎、三時間と五時間と、恚うして居ては、魂が抜けて、身體が藻脱の殻にならうも知れぬ、又の事、と思ひ切つて、晝過ぎ、出發て歸ることに極めると、それでも未だ買つて歸る土産に氣がついたもんだかか、

「旅客もついで、話の次手に心付いたか、又革靴を開けて取出した。」

「談話に紛れて、すっかり心付かなかつた、爰に

好<sup>さ</sup>下<sup>か</sup>物<sup>な</sup>がある、灘<sup>なだ</sup>萬<sup>まん</sup>とかいふの、蒲<sup>かま</sup>鉾<sup>ぼこ</sup>ださうだ。汽<sup>き</sup>  
車<sup>や</sup>の中<sup>なか</sup>で、酒<sup>さけ</sup>の時<sup>とき</sup>ツて、内<sup>うち</sup>から… 旅<sup>は</sup>籠<sup>たご</sup>屋<sup>や</sup>で、お歳<sup>せい</sup>  
暮<sup>ぼ</sup>に到<sup>たう</sup>來<sup>らい</sup>といふのを達<sup>たて</sup>引<sup>ひ</sup>いてくれた。一<sup>ひと</sup>ツ喰<sup>く</sup>はう、  
君<sup>きみ</sup>もやれ、甘<sup>うま</sup>いぜ、此<sup>こ</sup>品<sup>いっ</sup>は。」「

「其處で書生さんに調べて貰つて、革靴に積込むと、直に出發。」

皆が見送らうといふのを、いや、暫時の間も留守が大事だ、何か氣の利いたやうなことをいつて、其の代り、停車場まで腕車を、といふので、帳場の雇ひ込んで、さつさと引出させたは可い。これが其まゝ此處へつけば、何の仔細もなかつたのに、途中で、彼の記念碑を見ると、フト魔が魅して氣が變つたんださうさ。」

「えゝ、其處で、あの紫川へ。」  
 「否、そら、ものが記念碑だらう、何か不知、禁酒事件に取つては、千之助に一大記念のある牡丹亭だ、腕車の上で、不圖其處を思ひ出した。」

行つて見よう、と突然聲をかけて、梶棒を其方へ向けさせたんだ。

餘り物足りない旅行なり、飽氣なし、それに汽車

も此の急行があるといふ考へで、牡丹亭へ行つて見ると、一寸腰をかけてと思つたのが、つい、其の何となく懐しくつて、歸られない。酒は飲めないのに、肴は鮑、あの片思ひといふのなんぞ、氣にして箸もつけないで、人ツ子一人居ようぢやなし、寂れた景色を視めて居る中、雪がちら／＼と降り出した。

厭に底冷がして、一體昨日あたり、青空が見える底から、時々さつと、高い銀杏の梢から、落葉するやうに降つたつけ。

又此の雪が禁物なんだ。

何でも千之助が其の戀人を見納め、といふのが、其の人、湯あがりで、ほんのりして、濡髪が思はせぶり、横顔にかゝつた姿で、机に頬杖をついた處を、硝子窓、其の窓へ一ぱいにしつきりなく、雪がかゝつてこんもり、球で飾つたやうなそこへ、ぼんやりと赤く灯の影が映るのを、杉の垣根越。其の家から歸り際、玄關で分れた道が、屋敷町の裏手へぐるりと廻つて、送つて部屋へ入つた令嬢の居間を、梅の枝から透かした處。

然も結納の取交はせのあつた夜さ。千は、

旅客は激しくいつた。

「男子でありながら、何だらう未練らしい、雪の中に立窄んで、暫時熟と見る内に、見る／＼中に其の令嬢の顔の色が部屋の内暖さに、硝子窓には露さへ置いたのに、颯と青白くなつたのを、あゝ、心の冷さが、面に顯れる位な女と、怨みに思つた事もあつたが、天死をされた時には、ぢや、もうあの時分も、影が此の世の人ではない、早や既に白玉樓中の仙女であつたのかも知れないなどと、何かにつけて愚になつて、くだらない事も忘れないから。

雪で又思ひ出した。

然も急には留みさうもない、其處等も白くなる、火鉢を壓へてつくねんとしたツ切、名残が惜くつて立てないから、日の暮れるまでも恚してなぞと。

しかし冷い中に待つて居る車夫は氣の毒千萬、それに新年で急しからうと、其處で、荷物を引取つて返したさうだが、此が又悪かつた。

さあ、居ると極めると歸りたい、何の、一人で其處に熟として、日の暮れるまで遊ばれるくらゐなら、

最もう一ひと晩ばん、姉あねさんを待まつたつて可いいわけなんです。

革かばん鞄かばんを提さげて、せつかちに牡ぼたん丹てい亭ていを飛とび出だすと、い  
つかの大おほい池けの岸きしについて町まちはづれまで一いっ町ちやう足たらず、  
火やけど傷やけどをして乗のせられた時とき覺おぼえがある、此こゝ處ちで車くるまを、  
とおも思おもつたが間ま違がひで、さあ、無なからう。

記き念ねん碑ひの處ところまで出でさへすりや電でん車しゃもある事ことと、其そ  
のまゝ目めつぶしを喰くふ雪ゆきの中なかをかまはず、突つ切きつて  
何なん町ちやうか分わからない、方ほう角かくをつけて急いいで來くると、間まの  
悪わるい時ときといふものは。何なんと鼻はな緒なをがプツッリ。

雪ゆきは薄うすくかゝつたばかりだから、踏ふ留みまるはずみ  
に路みちの悪わるい處ところへぐつしやり足た袋び跳はだし、出でるも引ひくも  
ならばこそ。

幸さいひ土ど堀べい板いた堀べいだの生い垣げつゞきの裏うら町まちで、一ひと人りも人ひと  
通ほりはなかつたから、魅つままれの體ていで躍をどつた形かたちは、御ご當たう  
地ちの人ひとへ見みせないで濟すんだが、其そのまゝぢや何どうする  
事こともなりません。

可い鹽あんばい梅ばいに、雪ゆきも小こ降ぶりになつたから、おまじなひほ  
どどに白しろく積つもつた、路みち傍ばたの杉すぎ垣かきに革かばん鞄かばんを寄よせかけて、  
ともかく馴なれぬ旅たび路ぢといふ體てい裁さいに、下げ駄たを結ゆは  
へつけようとして居ゐると。 「



「（貴客、貴客、）と優しい聲で呼び懸けた婦人がある。

此方は手巾を引裂くのも面倒だから、其まゝで、と俯向いて結んで居た處、其處等に知己はなし、婦人だし、別に通りがりのものがあつて、其に話しかけたのだらうと思つたけれど、呼ぶのがつい耳近で、宛然枕頭で驚でも鳴くやうだから、振向いて見ると直ぐ背後。

革靴を立てかけた杉垣の其の枝折戸に、目の覺めるやうなのが立つて居た。

年紀は二十三、四、後で七ツになる兒と、五ツのと、二人の母親であることが知れたんだから、六、七かも分らない。

生際の濃い、あまるほど澤山な髪を花月巻で、冴々しく燦々する寶玉を飾つた横櫛、乙女椿の花簪、目の涼しい、二重瞼の、頬のふツくりした、色の白い、口許の緊つた少し濃逸ぎると思ふ程に眉のくつきりとした、脊も些高過ぎるばかりだから、猶見榮があ

る、肉が厚いといった柄で、立増った品格があるではないが、何となく總體におもみのある、其が然も媚めいた形容だつたさうだ。

一寸見には 先づ、燃え立つ牡丹の大輪のを、どんより曇つた少し蒸暑い日に、身體へ汗ばんで視めるといつた風情。顔を見たばかりでも、ほんのり人肌の暖さが身に染みて、ちら／＼降つて居る雪も、其の人の身に觸ると忽ち颯と薄紅。花片にもなりさうな。傘はさ／＼ず、赤い鼻緒の上草履で其こそ小留みのない白いものが、圓く積つたやうな新しい足袋。構はず薄雪の庭芝を踏んだが、片褻がぞり爪尖にかゝつて、惜氣もなく、蓮葉に小肥りのした二の腕の露なまで、枝折戸の柱に高く片手をかけて、伸上つて覗くやう。

片手に桃色の絹の手巾をはらりと、其の手で上前の褌を取るやうに、葡萄鼠の風通お召の上衣の、朱鷺色の扱帯があらさまに、恚うずり下つて幅廣な、其下あたりで軽く指のさきで引上げたが、一體に着崩れのした、下着はづつしりと更紗縮緬、紅色友染の對丈襦袢も、裾長う、身うごきをする藤色の其

の裾が、はら／＼となる、しどけなさ。

上に黒縮緬三ツ紋の羽織を、無造作に引っかけたが、肩を、こつて、其の襟を取った手首にからんで、緋綸子の裏が、だらりと肩へ、一太刀浴びた紅かと、罪も、報いも、情も、色も、其處から溢れるばかりの装。

見てさへ然うだのに、片膝取亂したほどの酒機嫌か、羽織のずツて落ちるまで、炬燵にでも蒸されたらう、うつとりと濕ツばく、霞を帯びた肌の艶、顔の色、雪にめげないのも道理であつた。

(私ですか。)

(貴客、嘸御難儀でございませう。)ツていつたさうだ、こりや勿論鼻緒を踏切つたのを見て、しんせつで出て来たんだね。

然ういつて、両手で手巾を扱いて、斜違に胸へかけて、裂く眞似をした時、微に口を歪めたが、(あれからお見受け申しまして、私も、あの、手巾でも差上げませうと思つて来たんですがね、お待ち遊ばせよ、貴客、それぢやお穿物が間に合ひましても、

御足が泥だらけで、あれ、臺なし。お氣味が悪くつて不可ません。まあ、一寸お寄り遊ばして支度をなすつて行らつしやい。さあすぐに。否、私だつて、お世話をやかして頂きたいと存じて、出て來たのでございますもの、御遠慮を遊ばすな。誰も居りはいたしません。と莞爾していつたさうだ。

平に辭退をしたんだが、又雪も増して來たし、ついでに其の言に誘はれた。

（お庭口から失禮です、お言に甘えませんが、しかし表へ廻りましてお臺所口で何うぞ。）（貴客田舎家へおいで遊ばして、そんな事をおつしやるものではございません。）と招いて手を取るやうに、身體にまで心を入れて、千之助を連れ込んだが、どうして田舎家どころぢやない。

大家の別荘と見えた、生垣の工合なぞは古風な寮のやうに眺へたが、向うと正面に小高い西洋造の構があるんだ。

赤帽が突然、

「旦那、其、其奴が、どんなことをいたしました。と猪口を持った手が震へた。

「知つてるか、」  
「名古屋に西洋室のある別荘は一軒しかございませんで、淫婦！」といった眼の色尋常ならず、ぎり、旅客の目に映つて、殺氣を帯びて見（えた）のである。

【紅雪】

録完・續紅雪録へ】